

国

語

(
解答
番号

1

5

38

)

第1問

次の文章は、田中^{たなか}大介^{だいすけ}「待ち合わせの変容」(二〇一〇年発表)の一部である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で表記を一部改めている。(配点 45)

あの人と会えるだろうか……。きつと会える。いや、会えないかもしれない……。待ち合わせには多かれ少なかれこうした期待と不安が交錯している。相手が絶対に来ないと知りつつ待ち続ける場合を除けば、人が待ち合わせ場所に行くのは、相手が来ると期待しているからであり、相手が待ち合わせ場所に来るのは、自分もそこに行くかと相手が期待しているからである。ということは、相手が来るという自分の期待は、自分も行くという相手の期待に「アイキョ」しており、逆もまた同様となる。つまり、待ち合わせの成立は「期待の期待」というかたちで相乗化され、理論上、無限後退していくような不安定な事態なのだ。Aはたして「会うことはいかにして可能か」。

この待ち合わせにまつわる期待と不安は、「社会秩序はいかにして可能か」という定式で知られ、社会(学)の起源に位置する秩序問題に触れている。秩序問題は、トマス・ホップズ——「万人の万人に対する闘争」という自然状態と、その解決としての社会契約——を遡及的に經由してタルコット・パーソンズにより定式化された「二重の不確定性」(double contingency)以来、ニクラス・ルーマンらによって複数のレベルで盛んに議論されてきた。ここでそれら全てに触れることはできないが、さしあたり二重の不確定性とは、ひとことでいえば、他者の行為の成否が自分の行為次第であり、自己の行為の成否が他者の行為次第であるような両すくみのコミュニケーションのことである。^(注4)待ち合わせがつきつける不安は、このコミュニケーションの本源的な不確定性、すなわち自明のように感じられている「社会」の底が抜けているかもしれないと告げる囁きの^{ささや}ようなものだ。

しかし、私たちは日々、人と会っている。では、私たちは、どのようにしてそうした囁きを振り払って、待ち合わせへと出かけているのだろうか。

普段、何気なく行^{おこ}なっている待ち合わせだが、二つ以上の身体が時と場をあわせるにはそれなりに慎重なコミュニケーションを必要としている。とりわけ現在では、モバイルテクノロジーが浸透するにしたがって、待ち合わせというコミュニケーション

が変容し始めている。たとえば、二〇〇七年、地下鉄開通八〇周年のポスターが東京メトロの各駅に貼り出された。そのなかには渋谷ハチ公像を撮った（少なくとも一九八九年以前の）古い写真が使われているものがある。現在とは異なり北を向いたハチ公像の後姿が映し出され、「ケータイがなかったあの頃は、今より、人気者でした」というキャプションがついている。これはどういう意味だろうか。

本稿では、すでに多くが語られているつながり志向のケータイ研究とは異なり、現代の待ち合わせにおいて現れる時間空間形態の変容を考えることで、社会の起源と交差するメディア・コミュニケーションの現在を考えたい。

あらかじめ「待ち合わせ」というコミュニケーションを限定しておく。待ち合わせとは、別の場所にいる複数の身体が、それぞれの身体が存在していた場所以外の場所に移動し、場を共有することとする。したがって、待ち合わせは、ある身体が別の身体が存在する空間（住居、職場等）に一方方向的に移動する「訪問」とは区別される。つまり、待ち合わせとは、後続するコミュニケーションを導くための「中間」にあり（待ち合わせたらそれでサヨナラというのは特異な状況だろう）、待ち合わせ場所とは、別の場所が存在する複数の身体の「中間地点」ということができる。

さて、**B** 待ち合わせという中間的なコミュニケーションは、すべての社会において同じように重要なわけではない。たとえば、限定された活動パターンと閉じた活動範囲で成立する共同体では、集団のメンバーの各身体の所在地や活動の時間的パターンを比較的内容に把握・予期できる。したがって、共同体における待ち合わせの必要性はあまり高くないだろう。

一方、相互の活動内容や活動範囲を把握していない共同体間のコミュニケーションにおいては、時間と空間をあわせる待ち合わせが必要になる。諸身体の活動範囲や活動パターンが分化すれば、相互の所在地や活動の時間的パターンの把握・予期が難しい。そのため、個別の活動をする複数の身体が共通の指標をもとに、あらかじめ 予め時間・空間を合わせなければ、（イ） 出合いは「グウゼン」に委ねられるほかない。つまり、個別の活動に従事する複数の身体が共通参照できる数量として均質化した時間と、離れた場所に存在する個別の身体が共有知識として了解した中間地点——すなわち、クロックタイムとランドマークを用いた待ち合わせが必要となる。それと表裏の関係にあるのが、遅れを逸脱としてまなざす規範と、それに伴って現れる遅れに対するストレス、す

なわち「遅刻」という観念の成立である。したがって、待ち合わせは、各身体の活動領域が個別化するほど拡大し、機能分化した近代の都市や地域において、より自立したコミュニケーション形式として要請される。

では、近代の待ち合わせはどのようなコミュニケーションだったのか。日本で最も知られた待ち合わせ場所であるハチ公像を例に考えてみよう。

ハチとは東京帝国大学教授上野英三郎が飼っていた秋田犬のオスである。ハチは、外出する上野を渋谷駅まで見送り、大正一四（一九二五）年五月、上野が講義中に亡くなった後も、渋谷駅に立ち寄り続けた。上野の帰りを待ち続けるハチの姿は「忠犬」と讃えられる。このハチ公の物語は、昭和七（一九三二）年一〇月四日の東京朝日新聞に「いとしや老犬物語、今は世になき主人の帰りを待ちかねる七年間」という記事が投稿されたことをきっかけにして広がったもので、昭和九（一九三四）年四月には渋谷駅前にハチの銅像が建立された。さらにハチが死亡した昭和一一（一九三六）年以降、毎年、慰霊祭がハチ公像前行なわれ、ハチ公像は儀礼を通して象徴化されることになる。

ただし、「忠犬Ⅱハチ公」の神話には異説も存在している。死亡後のハチの胃から焼き鳥串が発見されたことをもって、ハチは駅前で焼き鳥をもらうために渋谷駅に通っていたとする説である。問題は、「忠犬Ⅱハチ公」説と「動物Ⅱハチ公」説の正誤ではなく、なぜ「忠犬Ⅱハチ公」神話がもつともらしいものとして普及したのかだろう。

たとえば、昭和三〇（一九五五）年の読売新聞の記事「ハチ公に^{かわ}変らぬ愛と真心」では、「ハチ公のまわりにはハチ公にかわって昼も夜も常に百人近いシン^ウケンなヒトミが改札口のほうをみつめている。『待ち人』の来るや来ずや……」読売新聞一九五五年五月二六日と書かれ、待ち合わせをする人びとがハチ公に重ねあわされている。

このハチ公という象徴に仮託されている待ち合わせの意味は、たとえば以下のようなものである。「盛り場のなかの小さな広場／せまい空の下の本チ／ひと待ち顔は美しく／そして悲しいもの／たとえばそれが／ささやかな約束／あどけないデイト／買い物のおともであっても……／「待つ」ことで人生を知りはじめ／「待つ」ことで老いていくからです」（朝日新聞一九六〇年九月一九日夕刊、投書「待ち合わせ」）。この投書の待ち合わせは切なく、美しいものとして意味付けられており、「忠犬Ⅱハチ公」

の物語と通底している。

これらの言説は、待ち合わせを「待つこと」として捉えている。待ち人が来るかこないかはわからないし、それは待ち続けたいとわからない。待ち合わせとは、そうした長い不安と忍耐の時間的経験であり、ハチ公像とは「コミュニケーションの不確定性に耐える受動性」の空間的象徴なのである。ハチ公神話を——少なくとも戦後のある時期まで——もっともらしく思わせていたもののひとつは、待ち合わせの不確定性に耐える「待つこと」のリアリティだったのである。

C
しかし、戦後になるとハチ公神話にも変化がみられる。

たとえば、昭和四三（一九六八）年の「忘れられる美談」という記事では、「帰らぬ主人をまつて十年間、じつとすわりつづけた『忠義の物語』を知る人の数も減ったという彫像維持会の幹事さんの言葉をまつてもない。（中略）『キミ、あそこでデートの待ち合わせしたことある？』『ない。あそこきらいなの。なぜって？』イヌは、三日飼えば三年恩を忘れないっていうでしょう。わたし、あれがイヤなの。なにが忠犬よ。なれていただけじゃないの。つまり、不潔ってこと」（読売新聞一九六八年三月二四日）。「待つこと」は美しさではなく、執着とされ、反転する。ハチ公が焼き鳥をもらうために渋谷駅に通っていたという「動物ハチ公」という対抗神話は、「なれていただけ」というこの感覚の延長線上にある。

さらに一九八〇年代になると、「渋谷ならハチ公前、新宿の紀伊国屋前、^{（注9）}あまりにも有名な待ち合わせ場所だが、近ごろそうした人待ち場所も変りつつあるようだ。わかりやすい所というだけでなく、ファッション性や遊び心も場所選びの要素になっている。（中略）スタジオアルタという空間そのものがファッションとされ、^{（注10）}「ファッション感覚に敏感な若者たちは、道玄坂の『109』や公園通りで待ち合わせる」（読売新聞一九八六年六月一〇日、「」内は引用者）。

待ち合わせは、ハチ公が担った「悲しみや美しさ」の重い物語から「ファッション性や遊び心」といった軽やかな記号的イメージの戯れへと転換し、待ち合わせ場所は、そうした記号的イメージの演出される舞台として量産される。すでに新宿では、「シンボルがないために、待ち合わせ場所を演出」（朝日新聞一九七八年九月二〇日）し、^{（注12）}交通導線を作り出す商業地区の活性化が行われている。ハチ公像に対抗して渋谷駅南口にモヤイ像が設置されたのも一九八〇年である。^{（注13）}

複数の身体が^(エ)タイリユウでできる空間を構築し、ファッショナブルに演出することで、ハチ公以外のどうということのなかった空間が「待ち合わせ場所」として生産される。そして、そうした「空間の生産」のなかでゾウ^(オ)シヨクし、拡散していく待ち合わせ場所が「新しい／古い」や「オシャレ／ダサイ」といった流行のコードによって意味付けされ、選択されることで、**D**待ち合わせは、不確定性と戯れるコミュニケーションとして消費されていたのである。

(注) 1 トマス・ホップズ——イギリスの哲学者(一五八八—一六七九)。

2 タルコット・パーソンズ——アメリカの社会学者(一九〇二—一九七九)。

3 ニクラス・ルーマン——ドイツの社会学者(一九二七—一九九八)。

4 両すくみ——三者が牽制^{けん}し合って自由に行動できない「三すくみ」からの造語。

5 東京メトロ——東京地下鉄株式会社のこと。

6 メディア・コミュニケーションの現在を考えたい——この文章はこの考察がなされる前の部分にあたる。

7 上野英三郎——日本の農学者(一八七二—一九二五)。

8 東京朝日新聞——日刊新聞である朝日新聞の東日本地区での旧題。大正期には東京五大新聞の一角として数えられた。

9 新宿の紀伊国屋前——新宿駅東口近くにある紀伊国屋書店の新宿本店前。

10 スタジオアルタ——新宿駅東口前のビル新宿アルタの七階にあったスタジオ。ビル壁面には超大型モニターが設置されている。

11 道玄坂の『109』や公園通り——道玄坂は渋谷駅の西側にある坂道で、その登り口にテナントビル『109』がある。公園通りは渋谷駅の北側にある坂道で、店舗などが立ち並ぶ繁華街になっている。

12 交通導線——ここでは人の流れを導く経路のこと。

13 モヤイ像——渋谷駅にある、イースター島のモヤイ像を模した石像のこと。

問 1

傍線部(ア)と(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①と④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
5

(ア)

① イイ諾々として従う
② テンイ無縫なふるまい
③ イフウ堂々とした行進
④ 旧態イゼンの考え方

(イ)

① 思わぬ困難にソウグウする
② ドグウを展示する
③ イソップのグウワを読む
④ 大都会のイチグウで暮らす

(ウ)

① ボウケン小説を読む
② ケンドウの試合に出る
③ 犯人をケンキョする
④ ケンキョな人柄

(エ)

① 密命をオビる
② 大切な本をカス
③ 工事がトドコオる
④ 注意をオコタる

(オ)

① フクシヨク業界に興味をもつ
② 車海老をヨウシヨクする
③ シンシヨクを忘れて勉強する
④ 本棚をブッシヨクする

問2

傍線部A「はたして『会うことはいかにして可能か』」とあるが、筆者がこのような表現で問いを投げかける理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

6

- ① 待ち合わせには互いに相手が来るかどうか知らない不安が生じるが、このことが、自他相互のコミュニケーションの成立が必ずしも保証されていないという社会の問題と関連している点を強調するため。
- ② 待ち合わせは理論的には成立が難しいながらもやむを得ず実践されてきたものであるが、このことが、社会もまた学術的にはその自明性が疑われてきた不確実なものであることと関連している点を強調するため。
- ③ 待ち合わせは期待と不安という感情が入り交じっているものであるが、このことが、社会においても期待と不安を持ちながら人間関係を築いていかなければならないことと関連している点を強調するため。
- ④ 待ち合わせには相手の行為への信頼を互いに持たなければ成り立たない面があるが、このことが、人と人との信頼関係なしには社会秩序は維持できないという社会の不確定性と関連している点を強調するため。

問3

傍線部B「待ち合わせという中間的なコミュニケーションは、すべての社会において同じように重要なわけではない」とあるが、その理由の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 解答番号は 7。

- ① 人びとの活動する場所が住居や職場などの機能によって分化した近代社会では、それらの機能とは別に待ち合わせにふさわしい場所を設定する必要があるが、人びとが限られた範囲で活動している共同体では、改めて待ち合わせのための「中間地点」を設定する必要がないから。
- ② 各人の活動領域が拡大し相互の活動パターンが個別化した社会では、自立したコミュニケーションとしての待ち合わせが必要になるが、集団のメンバーの活動が限られている共同体では、他の活動をともなつた複雑なコミュニケーションとしての待ち合わせが行われるから。
- ③ 人びとがそれぞれの場所で個別の活動をしている社会では、各人が移動を最小限にするための待ち合わせ場所を設定する必要があるが、人びとの活動範囲や活動パターンがそれぞれのあいだで把握されている共同体では、待ち合わせをするよりも訪問する方がより効率的といえるから。
- ④ 各人の活動時間や活動場所が多様な社会では、共通の指標に基づいた待ち合わせの場所と時間を設定し、その設定から外れない行動をすることが必要であるが、各人の活動内容が把握されており相互の活動時間や活動範囲が予測できる共同体では、待ち合わせの必要性は低いから。

問 4

傍線部C「しかし、戦後になると八千公神話にも変化がみられる。」とあるが、「八千公神話」の「変化」に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 解答番号は 8。

① 「忠犬Ⅱ八千公」神話は、「いとしや老犬物語」や「八千公に変わぬ愛と真心」といった八千の物語を肯定的に伝える新聞記事によって真実性を持った神話として普及していったが、八千の物語を「なれていただけ」と捉える若者の声が新聞記事で報じられることで「忠犬Ⅱ八千公」神話の信頼性が疑われるようになったということ。

② 「忠犬Ⅱ八千公」神話は、主人を待ち続ける八千の姿を「忠犬」と讃えた人びとによって神話化されたものであり、銅像や慰霊祭によって多くの人に認知されていったが、駅に通い続けた八千の姿を焼き鳥に対する執着と捉える人が増えるにつれて、「動物Ⅱ八千公」神話をもっともらしいものとして受容されるようになったということ。

③ 「忠犬Ⅱ八千公」神話は、主人の帰りをじっと待つ八千の姿と待ち人の訪れを一途に待つ人びとの姿とが重ねあわされることで美しい物語として作り上げられていったが、美化された神話を嫌悪する新しい感性の登場によって、八千の動物的な習性を強調した「動物Ⅱ八千公」神話が対抗神話として作られていったということ。

④ 「忠犬Ⅱ八千公」神話は、待ち人に会えるかどうかという不安に耐えることの切なさや美しさの象徴として人びとのあいだに浸透していったが、八千の忠義の物語が次第に忘れられていくとともに、待ち人を待ち続けることを未練がましい行為と捉える感覚が出てきたことで、「忠犬Ⅱ八千公」神話の象徴性が薄れていったということ。

問5

傍線部D「待ち合わせは、不確定性と戯れるコミュニケーションとして消費されていたのである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 解答番号は

9。

① 一九八〇年代以降、象徴的な意味を持った待ち合わせ場所がファッションブルな演出によって新しく意味付けし直されていく。それにともない待ち合わせは、待ち合わせが成立するかどうかという不確定性に耐えるものから、流行に彩られた都市空間に身を投じて待ち合わせという状況を消費していくものになったということ。

② 一九八〇年代以降、待ち合わせ場所はファッション性や遊び心が演出された空間として次々と量産されていく。それにともない待ち合わせは、相手が来ることをじっと待ち続けるものから、流行のイメージによって選択された空間のなかで、待ち合わせの成否が不確定な時間そのものを積極的に享受するものになったということ。

③ 一九八〇年代以降、わかりやすい場所というだけではなく商業的に活性化されていることが待ち合わせ場所の選定において重視されていく。それにともない待ち合わせは、待ち合わせ場所で相手と会ったうえで次の目的地へと移動する行為から、相手と待ち合わせ場所で遊ぶことまでを目的とする行為になったということ。

④ 一九八〇年代以降、多くの人が集まることのできる場所が各所に生産され、ファッション感覚に敏感な若者によって新しい待ち合わせ場所として意味付けられていく。それにともない待ち合わせは、有名な待ち合わせ場所で相手を待ち続けるだけの受動的な行為から、待つこと自体を楽しむ能動的な行為になったということ。

問
6

本文の表現上および構成上の特徴として**適当でないもの**を、次の①、④のうちから一つ選べ。解答番号は

10。

- ① 新聞に掲載された見出しや記事など当時の資料を引用しながら、ハチ公や待ち合わせに関するその時代の人びとの考えや感性を参照できるようにしている。
- ② 議論の対象である待ち合わせについて、本文の前半部分においてあらかじめその意味を限定し、議論の焦点を整理したうえで考察を進めている。
- ③ 古くから待ち合わせ場所として有名なハチ公像を例にとることで、待ち合わせをめぐる人びとの捉え方の歴史的変遷を把握できるようにしている。
- ④ 待ち合わせに関する複数の研究者の見解を提示したり、複数の具体例を考察したりすることで、提起した問いに対する多様な結論を示している。

第2問

次の文章は、野々井透「棕櫚を燃やす」(二〇二三年発表)の一節である。春野(私)は、妹の澄香と父とともに暮らしている。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。(配点 45)

まぶたを開くと、木蓮の枝から、白いはなびらが一枚真下に落ちた。

それがあまりにたやすい落ち方だったので、だから、もう家の中に入ろうと父に声をかけようとしたら、蝶の羽ばたきみたいなゆつくりと不規則な砂利を踏む音が聞こえてきた。澄香の足音だ。サーモンピンクのワンピースに黒のライダーズジャケットを着た澄香が庭へ現れる。

5 「ただいま」

「おかえり」

澄香が私の隣に座ると、窓辺の空気がたゆんだようになり、からだから力が抜けてゆるんでゆく。

「みんなのふつうより、大事なのはきみのふつう」隣で上着のポケットに両手を入れたままの澄香が言った。

「なにそれ？」

10 「今日、ナバタメさんが施設の壁面に設置した町会の懸垂幕のスローガン。なかなか、いいでしょ。残念なことに、その前を通り過ぎるほとんどの人は気付いてないみたいだけど」

「なかなか、いいかも」と考えずに返答する。通常から自分のふつうを優先し過ぎている(ア)きらいのある私は、みんなの中にいると不安になる。あまり興味の無いことをそれでもみんなと笑いながら話していると、体温が低くなってきて、ああ、魚類になりたい、などと思い始める。みんなの中にあるとされているふつうと呼ばれるものは、自分のふつうの一番外側を薄っぺらく剥ぎ取ってくっつけ合わせたような、すぐにでも破れそうな球体みたいなもので、脆いのを知っているのに、その球体の中の方が安楽だと思ってしまう。A 危険な装置のようで、呪いの文句のようだ。けれど、信念だとか、誇りみたいなものを持つことは、誰かに対する暴力につながるのではないか、とも恐れている。

「家に帰る前にこの懸垂幕見たら、なんだか後押しされる気がするの」
「後押しって？」と澄香に聞く。

20 「また明日って思えることの後押し。また明日今日と同じ時間に起きよう、とか、また明日朝礼の時は顔を上げてよう、とか、また明日帰りにスーパーマーケットに寄って魚の品定めをしようとか、ただ、今日の続きを繰り返せば大丈夫って、なんとなく思える気がする」

また明日、と思うことが簡単ではなくなったのはいつからだろう。

「しかも、今回の懸垂幕のフォントは明朝体みんちようたいだったんだよね」

「そうなんだ」

「ゴシック体より、いいでしょ」

「いいかも」とやはり考えずに返事する。

30 風が通ってゆく。棕櫚(注1)の葉先が揺れる。こうしていると、今日がいつのことだかわからなくなるようだった。昨日も、今日も、明日もなくなり、わたしたちは、生まれた順番も、男や女という区別も、父と娘という関係も取っ払って、いっこずつのただの鉱石みたいになってここに転がって、長いあいだ語らい合っているような気持ちになる。この星が減んでも、石になったわたしたちは宇宙で転がっていられるような気持ちになる。

35 **B** 澄香は仕事や同僚について、毎日のようにわたしたちに話した。わたしたちに話すことが、世界を納得するための彼女の方法なのだと思う。澄香はひとつひとつの物事を肯定的に納得しながら、進みたいひとなのだ。

毎日物語の続きを聴いているようなわたしたちは、行ったことのない澄香の働いている場所を細部まで思い浮かべることができた。保健所と文化センターが入る地下一階、地上三階建ての古びた施設。ススキのような色の皺しわの付きにくい布地の制服を着て、清掃をして、ゴミの回収と分別を行い、文化センターで催事があるときは集会室にパイプ椅子やテーブルを要望通りの位置へ並べて準備をし、終了後には元の位置に戻す。保健所でこどもたちの検診のあった日は、終わった後も施設のそこかしこに彼

40 らの声が残っているようで、その声までも拾い集めるように片付けをした。ちょっと待って、その振り込み、とか、つくっていいこう、誰かが君を語ることのできる街、とか、一寸先は少し明るいはず、とか、あなたと一緒に月しろを待つ、などと書かれた行政や町会の標語の懸垂幕を施設の外壁に下げる。これはナバタメさんに任された仕事で、この仕事を任せられると一人前と認められることになる。そして、ナバタメさんはこの標語を決める会議になぜか時折参加しているらしい(けれど、これらの文言は

45 本当に外壁に下げられているのだろうか)。掃除機は、子熊くらしいの大きさと重さであり(と、澄香が言う)、これを引っ張りながらよく滑る廊下を移動して行く。掃除中のコードは、歩行者の邪魔にならないように、見た目もすっきりしなければならいというルールがあつて、壁と並行にして沿わせて移動しなくてはならない。文化センターの第四金曜日の午後の琴のサークルの時空を曲げるような、半永久的に続くような弦を弾く音を聴きながら、階段の滑り止めをひとすじずつ掃除するのが澄香の一番好きな作業だった。

50 ナバタメさんにも会ったことはない。漢字の表記も知らない。でも、彼のことをよく知っている。晴れている日より、曇り空で、雨の降る直前の匂いが漂うような、そんなのが似合うひと。澄香の職場の一年先輩で年齢は澄香より十五歳上の四十四歳、痩せ型、趣味は川釣り、歩いていると誰かの落し物を見つけて拾うことが多くて、宴席は常に壁寄りを好み、ずっと枝豆なんかをつまんでいる。仕事の手順や職場のひとつの付き合い方というような話よりも、昨日釣った魚やその川水の冷たさや透明さや、岩に這う苔のやわらかさ、そんなことを話すひとで、少し寂しがりで、夜になると、これは私の想像だけど、少年の頃から親しんでいる詩集の中からその晩にふさわしい一篇の詩を選び出し、その世界にゆつくりと身を投じてゆくように読んでから眠りに就くひとだ。

55 澄香のこの職場は彼女が美大を卒業してから幾つ目だろう。この前は商店街にある耳鼻科の受付だった。耳鼻科の前は246号線の向こう側の学校の給食センター、給食センターの前は馬喰町の布問屋、その前は外苑のデザイン事務所。今の仕事は私と同じく今年で三年目だから、これまでで最も続いていることになる。

わたしたち姉妹は、仕事が長続きしない。

「それでも働き続けているのだから、上出来じゃない」と父は言うものだから、それもそうか、と簡単にわたしたちは腑に落ちる。父は些細なことを上出来じゃない、と褒める。出汁巻きたまごが少し破れてしまった時や、切り返しをしながらバックで駐車をした時や、忘れ物に気が付いて急いで家に戻った時。新しい仕事に就き、父に上出来じゃないと言ってもらい、今度は、きちんとしようと毎回思うけれど、しばらくすると澄香は物事を納めできなくなり、私は、水越しに見るようなばやけた

世界がさらに歪んで見えてくるのだった。

「春野の会社の主任さんは、今は週に何日同居してるの？」

「週二日のままだよ」

主任は二年程前から妻子と別居しており、最近になって妻子のいる家で週二日過ごすことになっていた。

「週休二日か」週休？ 妻子と過ごす日って休日の類なのかな？「休日じゃないの？」でも、同居の前日は、主任夕方から電話のかけ違いが⁽¹⁾やたら多くなるよ」とわたしたちが話していると、父が、まあでもそれが主任さんたちのふつうなんでしょう、と言った。

ひとりだったり、三人だったりで暮らしている主任のいる衛生用品を扱う小さな商社が、私の三つ目の勤め先だった。急行の停まらない最寄り駅から歩いて十五分程の場所にあるその会社は、社員の氏名をひとりずつ言えるくらいの規模で、部長という役職は存在せず、主任と課長と社長と皆同じ部屋で仕事をしている。総務部で私に任されている仕事は、文房具や備品の補充をしたり、交通費や出金請求の申請書の受付をしたり、年末の全社員で行う親睦会の会場を探したり、毎年参加する地域の盆踊り大会の手伝いなどで、毎週、毎月、季節ごとに決められたことに対処していくものだった。何かを変えようとか、変えないとか、どちらも自分には関係のないことと思うために、結局変わらないよね、と批評しているひとの⁽²⁾はす向かい辺りでその話を聞いているような私の働き方の姿勢は、三つ目の会社へ移っても同じだった。

「私のふつうは、どんなだろうなあ」さらさらと父が言った。

父は、さもありません、というようなスタンスのひとで、さもありません、そんなこともあるだろうさ、というようなことを父が

言うと澄香と私はくつき過ぎた気持ちと自分の間に隙間ができて、執着していた気持ちを、ついと手放してしまうことができ
 るのだった。未練なく手放したその気持ちは、あっさりとしただの「もの」のようになってしまう。 **D**
 は、澄香と私を楽しみしてくれる。だから父のさもありなん

(注)

- 1 棕櫚——やし科の常緑高木。
- 2 月しろ——月が出ようとする時、空が明るくしらんで見えること。
- 3 美大——美術大学の略。
- 4 246号線——東京都から静岡県に至る国道。
- 5 馬喰町——東京都内の地名。直後の外苑(明治神宮外苑)も同じ。
- 6 切り返し——一方に回したハンドルを反対に回して、車の進行方向を修正すること。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 11 ～ 13。

(ア) きらいのある

11

④ ③ ② ①

特色ある性質を持つ
気まぐれな性格を持つ
好ましくない傾向を持つ
人目につく特徴を持つ

(イ) やたら

12

④ ③ ② ①

急に
極端に
確かに
妙に

(ウ) はす向かい

13

④ ③ ② ①

斜め前
真正面
隣り合わせ
背中合わせ

問2

傍線部A「危険な装置のようで、呪いの文句のようだ」とあるが、「みんなの中にあるとされているふつうと呼ばれるもの」(14行目)を「私」がどのように考える理由として最も適当なものを、次の①、④のうちから一つ選べ。解答番号は

14。

- ① みんなの「ふつう」は、信頼できるものではないにもかかわらず、多くの人と同じという安心感を抱かせるものであり、「私」の心のなかに少数派への優越感を生じさせるものであるから。
- ② みんなの「ふつう」は、いつまで維持されるかわからないにもかかわらず、守られた世界にいるという心地よさを感じさせるものであり、「私」の内向的な性質をより強めるものであるから。
- ③ みんなの「ふつう」は、必ずしも正しいものではないにもかかわらず、従うべき常識として受け入れることを強いるものであり、「私」の感性を少しずつ鈍化させていくものであるから。
- ④ みんなの「ふつう」は、確かなものではないにもかかわらず、多くの人と同じという易きに流れる傾向を生み出すものであり、「私」の意識や行動を知らず知らずに制約するものであるから。

問3

傍線部B「澄香は仕事や同僚について、毎日のようにわたしたちに話した。」とあるが、澄香にとって話をすることにはどのような意味があるか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

① 澄香は、仕事の内容や同僚の人柄について鮮明に話すことによって、仕事への熱意が維持できない自分を克服して今の仕事に愛着とこだわりを持つようとしている。

② 澄香は、職場での些細な出来事も肯定的に話すことによって、これまでとは違い今の仕事には興味をもって取り組みていることを私や父に伝えようとしている。

③ 澄香は、仕事の内容や同僚の人柄について細部まで話すことによって、今の自分の仕事や置かれている環境を受けとめて日々の生活を前向きに送ろうとしている。

④ 澄香は、職場での些細な出来事も面白がって話すことによって、今の仕事や置かれている環境に対する不満を取るに足らないものとして納得しようとしている。

問 4

傍線部C「水越しに見るようなぼやけた世界がさらに歪んで見えてくる」とあるが、このように世界を見る「私」についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

16

- ① 周囲の人が話題にしていることに自分も興味を持つと懸命になるが、周りに合わせていくことに対して難しさを覚えそのような環境から次第に逃れたいと感じるようになり、人との関わりにますます消極的になってしまう。
- ② 料理や運転などの些細なことにもしつかりと取り組もうとするが、いつも小さな失敗を繰り返してしまうことから思うように生きられない自分という存在に段々と納得がいなくなり、勤め先からも逃げ出そうとしてしまう。
- ③ あまり興味のない話題であっても周囲の人々が笑っていれば同調しようとするが、それを続けているうちに本来の自分からは徐々にかけ離れていくように感じ、もともとあった周囲との距離や隔たりがさらに広がってしまう。
- ④ 新しい会社で働き始めるたびに今度こそ長く勤めたいと思うが、何かを変えたいのに変わらないという同僚の会社への批判を聞いていると、そうした意思がない自分は同僚と違っているという疎外感をいつそう覚えてしまう。

問5

傍線部D「だから父のさもありなんは、澄香と私を楽にしてくれる。」とあるが、「私」が捉えている父の人物像と、その父に影響された「私」の変化の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

① 父は娘たちの仕事が長続きしないことよりも働き続けていることを評価し、また日常の些細な失敗に対しても達成できたことに目を向けさせるように、物事を積極的に肯定しようとする人物であり、その父の姿勢や言動によって、「私」は自身の物事に対する否定的な見方を省みることができるようになる。

② 父は姉妹の仕事が長く続かないことに対しても働いているだけで上出来だと認めて心の負担を軽減させ、また主任と妻子についての話もさりげなく打ち切るように、困難を抱えた人に繊細に気を配る人物であり、その父の姿勢や言動によって、「私」は自責の念を捨て冷静に問題に向き合うことができるようになる。

③ 父は仕事で長続きしない姉妹に対しても非難せず、また主任と妻子の暮らし方についても特別視せず自然に受けとめているように、人の様々な生き方があるがままに受け入れる人物であり、その父の姿勢や言動によって、「私」は自身の生きづらさにとられる気持ちから距離をとることができるようになる。

④ 父は日常の些細なことを上出来だと褒めたり、仕事で長く続かないことに対しても働き続けている点に目を向けたりするように、娘たちに自身の勝手な期待や理想を押しつけない人物であり、その父の姿勢や言動によって、「私」はとらわれていた自己像を手放してありのままの自分を受け入れられるようになる。

問 6

次のノートは、Aさんがこの作品を読んで考えたことをまとめたものである。【ノート前半】では、本文中で気になった表現を抜き出し、そこから読み取れることを考えた。【ノート後半】では【ノート前半】での考察をふまえ、他にも澄香の話を聴いている「私」の様子が確認できる箇所を抜き出し、そこから読み取れる「私」のあり方についてまとめた。ノートを読み、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

【ノート前半】

○ 気になった表現＝括弧が付いているところ

◆ 41～42行目（けれど、これらの文は本当に外壁に下げられているのだろうか）

◆ 42行目（と、澄香が言う）

←

これらの表現から読み取れること…「私」は、澄香が言うことを

X

。

(i)

空欄

X

に入るものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

解答番号は

18

。

- ① 事実としてそのまま素直に受け入れているわけではない
- ② 彼女の心の内を知る手がかりとして冷静に分析している
- ③ 三人で楽しむための手段として極力遮らずに聴いている
- ④ 作り話として疑いの念をもって聴いているわけではない

○他にも澄香の話を聴いている「私」の様子が確認できる箇所

◆ 28 ～ 31 行目「昨日も、今日も、明日もなくなり、～わたしたちは宇宙で転がっていられるような気持ちになる。」

◆ 34 ～ 35 行目「毎日物語の続きを聴いているようなわたしたちは、行ったことのない澄香の働いている場所を細部まで
思い浮かべることができた。」

◆ 47 ～ 53 行目「ナバタメさんにも会ったことはない。～眠りに就くひとだ。」

←

これらの箇所から読み取れる「私」のあり方…毎日のように澄香の話を聴く「私」は

Y

。

(ii)

空欄

Y

に入るものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 解答番号は

19

。

① 妹や父との語らいを困難の多い日常を離れられる束の間の休息と感じており、澄香の話に描かれる世界に自分も身を置き心のよりどころとしていつも大事にしている

② 妹や父との語らいを時間の経過も忘れてしまうほど没頭できるものと感じており、澄香の話を何気なく聴き続ける日常の尊さを自分の心に刻み込もうと意識している

③ 妹や父との語らいを日常のしがらみや束縛から離れられる瞬間と感じており、澄香の話に自分のあるべき生き方が示されていると考えて隔々にまで注意を向けている

④ 妹や父との語らいを現実の時間や関係性から離れた心地よいものと感じており、澄香の話を想像を交えて受け入れることで自分の日常とは異なる世界を持ち得ている

第3問

しさんは、「本をデジタル機器で読むこと」をテーマに資料を集めてレポートを書くことにした。【資料Ⅰ】と【資料Ⅱ】は集めた資料をしさんがまとめ直したもので、【資料Ⅲ】は新聞記事の抜粋である。しさんは、資料を集めながらレポートの構成案の検討もしている。これらを読んで、後の問い(問1～3)に答えよ。(配点 20)

【資料Ⅰ】 学校読書調査より

調査者：全国学校図書館協議会 調査年：2022 年

調査対象：日本全国の中学生 4552 名、高校生 4806 名

表1 スマホやタブレット(注1)で電子書籍を読んだことがある生徒の割合(%)

中学生	52.8
高校生	61.0

表2 電子書籍で読んだのはどのようなものか(%)

	物語・小説 ・おはなし	ノンフィ クション	マンガ	事典や 辞典	図 鑑
中学生	56.0	13.9	82.9	5.6	4.2
高校生	53.8	11.8	83.3	8.0	2.4

※表2の調査では、電子書籍を「読んだことがある」と答えた人だけが対象となり、複数回答が可とされた。「その他」「無効・不明」にあたる回答は除外してある。

(『学校図書館』2022 年 11 月号をもとに作成)

(注) 1 スマホやタブレット——それぞれスマートフォン、タブレット端末のこと。デジタル機器。

【資料Ⅱ】 PISA(生徒の学習到達度調査)より

調査者：各国の調査組織や国際組織 調査年：2018 年

調査対象：15 歳の生徒(アメリカ 4811 名、日本 6109 名、ドイツ 5431 名)

表 3 本を読む媒体としてどちらをよく用いるかの割合(%)

	本をまったく、 またはほとんど 読まない	本は紙で読む ことの方が多い	本はデジタル 機器で読むこ との方が多い	本は、紙でもデ ジタル機器でも 同じくらい読む
アメリカ	30.6	35.1	16.3	18.0
日 本	25.7	45.5	13.2	15.6
ドイツ	39.9	35.3	11.3	13.5
OECD 平均(注 2)	35.3	36.5	14.9	13.4

表 4 表 3 の回答別に見た読解力の平均得点

	本をまったく、 またはほとんど 読まない	本は紙で読む ことの方が多い	本はデジタル 機器で読むこ との方が多い	本は、紙でもデ ジタル機器でも 同じくらい読む
アメリカ	465	543	494	526
日 本	458	536	476	520
ドイツ	475	552	479	528
OECD 平均	456	526	474	506

(国立教育政策研究所編『生きるための知識と技能 7』をもとに作成)

(注) 2 OECD 平均 — OECD はこの調査の実施主体になった国際機関で、経済協力開発機構のこと。ここではアメリカ、日本、ドイツを含む加盟国の平均を指す。

【資料Ⅲ】 新聞記事のデータベースより

国会図書館^(注3)「デジタルシフト」加速

「デジタル化の波は文明史の転換点。グーテンベルク革命^(注4)に類する、いやもっと大きな転換点といえるかもしれない」。就任4年目になる国会図書館の吉永^{よしなが}
もとのぶ^{もと}信館長が、そう切り出した。

2000年前後から進んできたデジタル展開が、コロナ禍で閉館を余儀なくされたのを機に、一気に加速した。絶版資料などの個人送信を認める著作権法改正を弾みにした形で、21年から5年間のビジョン「デジタルシフト」が策定された。

特に力を入れているのがインターネットでの資料提供だ。制限なしに誰でも読める60万点のほか、利用者登録をすれば絶版などで入手困難な資料184万点が閲覧できる。昨年から個人のパソコンやスマホで読めるようになり、約16万4千人の利用があった。館内のみ閲覧可能な資料も112万点ある。

視覚障害者向けに約247万点の全文テキストをダウンロードできる、バリアフリーのサービスも始まっている。

書籍、雑誌、新聞、博士論文、音源など4685万点超にも及ぶ所蔵資料のデジタル化も重点策の一つだ。書籍については国内で1990年前後までに刊行された資料の作業が進み、2025年までに新たに20世紀中の100万冊(国内)を目標にしているという。一方、書籍などと同様、デジタル資料の収集と長期保存もめざしている。

(「朝日新聞」2023年11月3日朝刊による)

(注) 3 国会図書館 —— 国立国会図書館のこと。国内の出版物を網羅的に収集・保存する。

4 グーテンベルク革命 —— ここでは、15世紀にドイツのグーテンベルクが近代的な印刷技術を発明したことを指す。

【構成案】

タイトル 本を読むときのデジタル機器の利用について

序論 レポートで書きたいことの要点を示す

本論 1 本を読む側の立場から

[事例] 中学生や高校生の状況

- ・日本の中学生と高校生の電子書籍の利用状況
- ・デジタル機器で読むことに関する国際調査の結果

本論 2 本を提供する側の立場から

[事例] 国会図書館の取組み

- ・デジタルの資料がどれだけあり、どのように利用できるか
- ・デジタル化に関するこれまでの状況とこれからの見通し

本論 3 本論 1・2 をふまえた自分の意見

X

結論 レポートで書いたことの要点をまとめる

問1 しさんは【構成案】の本論1に関連して、【資料Ⅰ】と【資料Ⅱ】の調査結果からわかることや考察できることをそれぞれ整理することにした。その組合せとして最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 20。

(ア) 【資料Ⅰ】—スマホやタブレットで電子書籍を読んだことのある生徒の割合と、そのうちどれだけの割合の生徒が表2の各種の本を電子書籍で読んだと回答したかということがわかる。

(イ) 【資料Ⅰ】—スマホやタブレットで電子書籍を読んだことのある生徒の割合と、その生徒たちが表2の本のうち電子書籍でどのようなものを最もよく読むと回答したかの割合がわかる。

(ウ) 【資料Ⅱ】—日常的に本を読む媒体として、各国の生徒が紙とデジタル機器をどのように使いわけているかということについて、および、そのような読書習慣と読解力の関係について考察できる。

(エ) 【資料Ⅱ】—日常的に本を読む媒体として、紙とデジタル機器のどちらをより多く利用する生徒が各国でどれだけの割合について、および、そのような読書習慣と読解力の関係について考察できる。

- | | | |
|---|-----------|-----------|
| ① | 【資料Ⅰ】—(ア) | 【資料Ⅱ】—(ウ) |
| ② | 【資料Ⅰ】—(ア) | 【資料Ⅱ】—(エ) |
| ③ | 【資料Ⅰ】—(イ) | 【資料Ⅱ】—(ウ) |
| ④ | 【資料Ⅰ】—(イ) | 【資料Ⅱ】—(エ) |

問2 シさんは、【構成案】の本論2として書く内容を【資料Ⅲ】をもとに検討している。このことについて、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

21

(i) シさんは、国会図書館にデジタルの資料がどれだけあって、どのように利用できるかについて、【資料Ⅲ】に書いてあることを図にまとめることにした。図の内容として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

- ①
- | デジタルの資料 | | |
|---------------|--------------------|------------------------|
| インターネットで閲覧可能 | | 館内のみ
閲覧可能
112 万点 |
| 制限なし
60 万点 | 利用者登録が必要
184 万点 | |
-
- ②
- | デジタルの資料 | | 館内のみ
閲覧可能な
紙の資料
112 万点 |
|---------------|--------------------|---------------------------------|
| インターネットで閲覧可能 | | |
| 制限なし
60 万点 | 利用者登録が必要
184 万点 | |
-
- ③
- | デジタルの資料 | | |
|-----------------------------------|------------------------|------------------------|
| インターネット
で制限なく
閲覧可能
60 万点 | 館内のみ閲覧可能 | |
| | 利用者登録
が必要
184 万点 | 利用者登録
は不要
112 万点 |
-
- ④
- | デジタルの資料 | | 館内のみ
閲覧可能な
紙の資料
112 万点 |
|-----------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------|
| インターネット
で制限なく
閲覧可能
60 万点 | 利用者登録
すれば館内で
閲覧可能
184 万点 | |

(ii) しさんは、国会図書館のデジタル化の取組みのこれまでの状況とこれからの見通しについて、【資料Ⅲ】に書いてあることを要約して情報を整理することにした。その内容として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

22。

- ① 二〇〇〇年前後から国会図書館はインターネットでの資料提供に力を入れている。コロナ禍でその動きが加速し、バリアフリーのサービスとして所蔵資料のデジタル化も始まった。今後はデジタル資料の収集もめざしている。
- ② 二〇〇〇年前後から進んだ国会図書館のデジタル展開は、コロナ禍を機に加速した。バリアフリーのサービスも始まろうとしている。より多くの所蔵資料がデジタル化されつつあり、デジタル資料の長期保存もめざしている。
- ③ 国会図書館は二〇〇〇年前後からインターネットでの資料提供に力を入れている。バリアフリーのサービスとして二〇世紀中の一〇〇万冊の書籍のデジタル化も始まった。今後は書籍およびデジタル資料の収集もめざしている。
- ④ 国会図書館のデジタル展開は二〇〇〇年前後から進んでおり、コロナ禍を機にそれがさらに加速した。バリアフリーのサービスも始まった。所蔵資料のデジタル化が進んでおり、デジタル資料の収集と長期保存もめざしている。

問3

しさんは、本論3に書く自分の意見を【構成案】の空欄 X に書くことにした。次の①～⑤のうち、書く内容として適当でないものを二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 23 ・ 24 。

- ① 【資料Ⅰ】から、電子書籍で読んだことがある本の種類としてマンガを挙げる生徒が多かったと確認できる。電子書籍の普及のためには、マンガのように身近なものから利用を促進するのが効果的ではないか。
- ② 【資料Ⅰ】から、事典や辞典、図鑑については、電子書籍でなく紙で読む生徒が多いことが確認できる。効率的な情報収集のためにも、事典や辞典、図鑑について電子書籍の利用を広めることは重要ではないか。
- ③ 【資料Ⅱ】から、どの国でも本をあまり読まない生徒の読解力は読む生徒より低いと考えられる。読解力の向上には、紙の本だけでなくデジタル機器も活用して読書に親しむ機会を増やすと有効ではないか。
- ④ 【資料Ⅱ】から、アメリカ、ドイツの生徒は読解力が高い傾向にあると考えられる。このことは両国のデジタル展開が先進的であることを意味しており、そこから日本も学ぶことが多いのではないか。
- ⑤ 【資料Ⅲ】から、関連の法律が整備されるとデジタルの資料をより多く利用できるようになると考えられる。デジタルの資料を利用しやすくするには、法律面でも取組みを進めるとよいのではないか。

第4問

次の文章は、『とりかへばや物語』の一節である。主人公の女君は女性であることを隠し、男性として宮中で活躍していた。ところが、権中納言(本文では「殿」)にその秘密が見破られ、迫られて契りを結んだ。その後、妊娠した女君は都から離れた宇治に住まわされ、子ども(本文では「若君」)を出産したが、結局、女君は兄弟の助けを借りてひそかに宇治から脱出した。これを読んで、後の問い(問1～5)に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に 1 ～ 3 の番号を付してある。(配点 45)

1 宇治には、若君の御乳母、明くるまで帰(注1)りたまはねばあやしと思ふに、御格子(みかうし)など参るほどまで見えたまはず。人々尋ねあやしがりきこゆるに、言はむ方なくあきれて、思ひ寄るまじきものの隈々(くまづま)などまで尋ね求めたてまつるに、(ア) いづくにかおはせむ。言ふかひなく思ひまどふほどに、殿おはしたるに、かうかうと聞こえさすれば、うち聞きたまふよりかきくらし心まどひたまひて、ものもおぼえたまはず。「さて、いかなりしことぞ。 A 日ごろいかなるけしきか見えたまひし。古里(ふるさと)(注2)のわたりより訪れ寄る人やありし」と問ひたまふを、我(注3)さへ騒がれぬべければ、乳母も え申し出(い)でず、「さる御けしきもえ見えはべらず。見たてまつらせたまふほどはさりげなくて、一(ひと)ところおはしますほどは、若君を目も放たず見たてまつらせたまひつ、うち忍び泣き明かし暮らさせたまひしをば、世の中に恨めしくもおぼつかなくも思ひきこえさせたまふ人やおはしますらむなどこそ、心苦しく見たてまつりはべりしか。かうざまに思(おも)ひしなるらむ御けしきとつゆも見たてまつらざりき」と聞くに、言はむ方なし。

2 (注4) 限りなくのみもてかしづかれたりし身を、いとかく忍び隠(かく)ろへたるさまにて、あなたさまのことを心に入れて扱ひつつ、ここにはありもつかず (イ) 都がちにあくがれたりつるを、げにいかに見も馴(な)らはずあやしくあいなしと (B) 思しけむを、うち見るにはすべてさりげなくやすらかなりし御けしきありさまの、かへすがへす見るとも見るとも飽く世なくめでたかりし恋しさの、やらむ方なく、時のほどに心地もかき乱り、来し方行く末もおぼえず、かなしく堪(た)へがたきに、巡りあひ尋ねあはむことおぼえず、いかにせむとかなしきに、若君のかかることやあらむとも知らず顔に何心なき御笑(みゑ)み顔を見るが、限りと思ひとぢ(注6)

むる世のほだしといとど捨てがたくあはれなるにも、あはれ、かかる人を見捨てたまひけむ心強きこそと思へど、あさましく、ことわりはかへすがへすも言ひやる方なく、胸くだけでくやしくいみじく、人の御つらさも限りなく思ひ知る。

3 臥したまひし御座所に脱ぎ捨てたまへりし御衣どものとまれるにほひ、ただありし人なるを、引き着て、よよと泣かれたまふ。かばかりのことを夢に見むだに覚めての名残ゆゆしかるべし、かたちけはひの言ふ方なく愛敬づきにほひ満ちて、憂きもつらきもあはれなるも、いとにくからず心うつくしげにうち言ひなしたまひし恋しさの、さらにたとへて言はむ方なく、胸よりあまる心地して、人の（ウ）をこがましと見思はむこともたどられず、（注7）足摺りといふらむこともしつべく、泣きてもあまる心地して沈み臥したまひぬる御けしきの、いみじくいとほしくわりなきを、**B**見たてまつり嘆かる。

（注） 1 帰りましたまはねば——女君が乳母の部屋から戻ってこないということ。前の晩、乳母は女君がその兄弟に会う場所として自分の部屋を提供していた。

2 古里のわたり——女君の実家や縁者。

3 我さへ騒がれぬべければ——自分までも責め立てられそうだということ。乳母は、女君とその兄弟が会うために協力したことを、権中納言に知らせていなかった。

4 限りなくのみもてかしづかれたりし身——かつて男性として宮中に出仕していた頃の女君のこと。

5 あなたざまのこと——都にいる別の女性のこと。この女性は権中納言との子を出産したばかりであった。

6 限りと思ひとちむる——ここでは、若君を見るのもこれが最後と決意して、出家などしてしまふこと。

7 足摺り——幼児が足を動かして激しく泣く時のようなしぐさ。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。 解答番号は

25

27

(ア) いづくにかおはせむ

25

- ④ ③ ② ①
- どこをお探しすればよいだろうか
 どなたにお尋ねするのがよいだろうか
 どこにいらっしゃるだろうか、どこにもいらっしゃらない
 どなたがご存じだろうか、どなたもご存じでない

(イ) 都がちにあくがれたりつるを

26

- ④ ③ ② ①
- 都にすっかり飽きていたのに
 都の人々を苦々しく思っていたのに
 都にばかり出かけていたので
 都の生活をいつも夢見ていたので

(ウ) をこがまし

27

- ④ ③ ② ①
- おろかしい
 騒がしい
 おそろしい
 わざとらしい

問2 波線部 a ～ d について、語句と内容に関する説明として **適当でないもの**を、次の ① ～ ④ のうちから一つ選べ。解答番

号は 28。

- ① a 「え申し出です」は、「え」が「ず」と呼応して不可能の意を表し、本当のことを言えない乳母の様子を表している。
- ② b 「思しけむ」は、「けむ」が過去推量の助動詞で、以前の女君の胸の内を権中納言が想像していることを表している。
- ③ c 「あはれ」は、「ふびんだ」という意の形容動詞で、取り残された権中納言が自らを哀れんでいることを表している。
- ④ d 「よよと泣かれたまふ」は、「れ」が自発の助動詞で、泣かずにはいらなかった権中納言の様子を表している。

問3

傍線部A「日ごろいかなるけしきか見えたまひし」とあるが、乳母は女君の「けしき」をどのようなものであったと答えたか。最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

29。

- ① 一人でいるときには、若君の世話もできないほど思い沈んでいる様子だった。
- ② 隠れて泣くことが多く、不満にも気がかりにも思っている人がいる様子だった。
- ③ 自分が周りの人たちに迷惑をかけることに対して、心を痛めている様子だった。
- ④ 宇治から去ろうとする強い意志があつて、少しもためらいはない様子だった。

問 4

傍線部B「見たてまつり嘆かる」とあるが、誰がどのように嘆いているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

30。

- ① 女君は宇治から逃げ出すまでに思いつめていたのに、その気持ちに気づくことができなかった我が身を省みて、実にふがないことだと権中納言が嘆いている。
- ② 女君に会いたくて我慢できずに泣きじゃくっている若君のあどけない姿を目の当たりにして、なんとしても女君に戻ってきてほしいと権中納言が嘆いている。
- ③ 女君を失ったつらさのあまり、まわりの目も気にしていられないほど悲しみに暮れる権中納言を前にして、ひどく気の毒なことだと周囲の人々が嘆いている。
- ④ いつまでも都を恋しがってばかりで権中納言や若君のことを少しも考えなかった女君の振る舞いに対して、あまりに冷淡なことだと周囲の人々が嘆いている。

問5

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

31。

①

1 段落では、乳母は、権中納言が宇治にやってきたと聞いて、叱責されるのが怖くなり暗い気持ちになった。

2

段落では、乳母から事情を聞いた権中納言が、女君の宇治での様子を思い出して、若君を残したまま行方知れずとなつてしまった女君の行動にも道理があったのだと考えている。

②

1 段落では、権中納言は、女君がいなくなったことに戸惑い、乳母がその原因を隠しているのではないかと疑っている。

2 段落では、権中納言は、手にかかる若君の育児を女君に任せきりにしていたことを振り返り、女君が苦悩を

抱えていただろうと考え、女君を責める気にならなかった。

③

2 段落では、若君は、権中納言も女君を探すために宇治から立ち去ろうとしているとも知らずに、無邪気な笑顔を

見せている。

3 段落では、権中納言は、女君が普段はかわいらしい様子でいたのに、実は自分をひどく恨んでいたこ

とを知つて、たとえようもない後悔の念にさいなまれている。

④

2 段落では、権中納言は、女君が悩みを表に出さずに穏やかな態度を自分に見せていたのだと考え、その人柄のす

ばらしさを回想している。

3 段落では、権中納言は、女君の香りが残る衣服を身にまといながら、愛らしい魅力に満

ちていた女君を思い出し、恋情を抑えきれなくなっている。

⑤

2 段落では、権中納言は、自身の女君への接し方に問題があったことを認めつつも、何も言わず突然姿を消してし

まった女君の強情さにあきれている。

3 段落では、権中納言は、華やかな女君の姿が夢に出てきた後に脳裏から離れ

なくなり、女君との思い出に浸りながらふさぎ込んでしまった。

第5問

次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文・返り点・送り仮名を省いたところがある。(配点 45)

段干木辞禄而処家。魏文侯過其閭而軾之。其僕曰、「君

何為軾文侯曰、「段干木在是以軾」其僕曰、「段干木布衣之

士。君軾其閭不已甚乎。」文侯曰、「段干木不趨勢利、懷君

子之道、隱処窮巷、声施千里。寡人敢勿軾乎。」段干木光於

德、寡人光於勢。段干木富於義、寡人富於財。勢不若尊、

財不若高。干木雖以己易寡人、不為吾日悠悠慙于影。

子何以輕之哉。」

其後秦將起兵伐魏。司馬庾諫曰、「段干木賢者、其君礼

之、天下莫不知。諸侯莫不聞。挙兵伐之、無乃妨於義乎。」

於^(イ)是秦乃^チ偃^{ふせ}兵、輟^{やメテ}不^レ攻^メ魏^ヲ。

〔『淮南子』による〕

(注)

- 1 段干木——戦国時代の魏の人。
- 2 閭——村里の出入り口にある門。
- 3 軾——車上から敬礼する。
- 4 僕——御者。
- 5 布衣之士——官位のない人物。
- 6 窮巷——わびしい路地裏。
- 7 悠悠——憂える様子。
- 8 慙^ニ于影^ニ——自身の影に向き合って恥じ入る。
- 9 司馬庾——戦国時代の秦の人。

問 1 波線部(ア)・(イ)について、ここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 32 ・ 33。

(ア)

「何為」

32

- ④ ③ ② ①
- どのような理由で
どのようなやり方で
なにを思ったか
なんということか

(イ)

「於是」

33

- ④ ③ ② ①
- ここに留まって
なんとかして
その場ですぐに
そのようなわけで

問 2 傍線部 A「寡人敢勿_レ軾乎。」の解釈として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

34。

- ① わたくしはゆえあつて車上から敬礼するわけにはいかない。
② わたくしは意味もなく車上から敬礼しているわけではない。
③ わたくしはどうしても車上から敬礼しないではられない。
④ わたくしはことさらに車上から敬礼したりする必要はない。

問 3

傍線部B「勢不_レ若_ニ☐X尊、財不_レ若_ニ☐Y高。」について、空欄☐Xと☐Yとに当てはまる語の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| X | X | X | X | X |
| 徳 | 徳 | 道 | 道 | 義 |
| | | | | |
| Y | Y | Y | Y | Y |
| 声 | 義 | 声 | 義 | 徳 |

問 4

傍線部C「段干木賢者」について、司馬庾がこうに言っているのはなぜか。それを説明する文として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 段干木は、権力者や資産家に頼らず、困窮した民を独力で救済していることが天下に知れ渡っているから。
- ② 段干木は、権力や利益を追い求めず、民間で高潔な生き方を貫いている人物として広く認められているから。
- ③ 段干木は、民間に埋もれて生き、諸侯に知られていないが、それを意に介さない人物として尊敬されているから。
- ④ 段干木は、民間人の立場にありながら、周辺諸地域との友好関係に尽力することで人々に敬愛されているから。
- ⑤ 段干木は、現在の君主を眼中に置かず、古_{いにしえ}の君主の政治を理想とする見識の高さが評価されているから。

問5 傍線部D「挙兵伐之、無乃妨於義乎。」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解

答番号は 37。

- ① 挙兵して魏を討伐するならば、我が国は道義に反することになるのではあるまいか。
- ② 挙兵して魏を討伐するとしても、必ずしも我が国が道義に背くことにはなるまい。
- ③ 挙兵して魏を討伐しようとするば、我が国はきっと道義を知る国々に阻まれるだろう。
- ④ 挙兵して魏を討伐しようとしても、我が国は道義を重んずる魏に負けるのではないか。
- ⑤ 挙兵して魏を討伐したとしても、魏が道義を貫くのを阻むことはできないだろう。

問6

本文と同じ内容の故事は別の書物にも記されており、そこでは次のような論評が加えられている。この論評の趣旨を説明する文章として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

38。

魏^レ文侯^ハ可^シ謂^フ善^ク用^ハ兵^ヲ矣。

〔呂氏春秋^{りよししゅんしゆ}による〕

① 魏の文侯は、在野の賢者を敬うなどして、日頃から民衆の心をしつかりと掴^{つか}んでいた。このため、軍隊に動員された民衆は將軍の命令によく従い、その結果、魏は他国の侵略から自国を防衛することができた。彼は民心の掌握によって軍事力の増強を達成したという点で、優れた戦略家だと評価できる。

② 魏の文侯は、在野の賢者を敬うなど、民間人とその活動を尊重する方針を取っていた。これにより、魏の人々は周辺諸地域と盛んに交流するようになり、その結果、魏は他国に侵略を思いとどまらせることができた。彼は民間の活力によって戦いを未然に防いだという点で、優れた戦略家だと評価できる。

③ 魏の文侯は、在野の賢者を敬うなど、民意を尊重して国を治める姿勢を取っていた。その一方で、軍事力の増強にもたゆまず努めて周辺諸国の脅威に備え、その結果、他国の侵略を抑止することができた。彼は理想を掲げつつ現実的な対応によって国難を乗り越えたという点で、優れた戦略家だと評価できる。

④ 魏の文侯は、在野の賢者を敬うなど、有徳者を重んずる姿勢で国を治めていた。このことは、広く天下に知られるようになり、その結果、軍隊を動かすまでもなく、他国に侵略を思いとどまらせることができた。彼は有徳者を敬うことによって戦いを未然に防いだという点で、優れた戦略家だと評価できる。

⑤ 魏の文侯は、在野の賢者を敬い、身分に拘^かわらず有能な人材を拔擢^{はつてき}する方針を表明していた。これにより、魏には知謀に長^たけた人物が多く集まることとなり、その結果、他国の侵略から自国を防衛することができた。彼は人材登用に よって軍事面の強化を達成したという点で、優れた戦略家だと評価できる。